調律
教りっちゃん
十八禁
18才未満の閲覧購入を禁止します
成人向け

もくじ

05 調律　田井中律

20 2010年夏コピーvol.4　中野梓

25 2009年夏コピーvol.2　琴吹紬

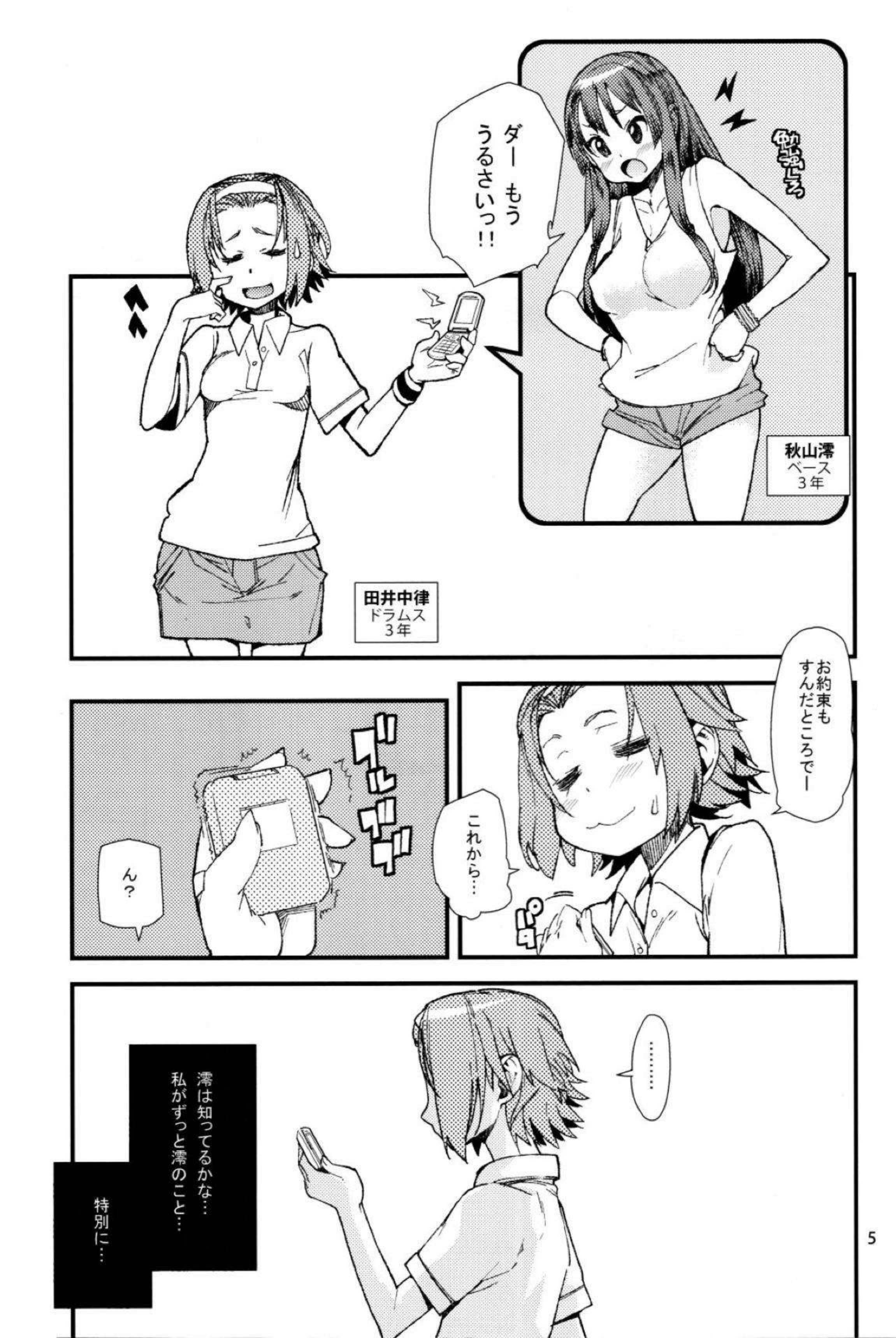
39 2010年冬コピーvol.5　山中さわ子

38 あとがき。

制作

カニキエル

巴天舞


ダー もう うるさいっ!!
秋山澪
ベース
3年
田井中律
ドラムス
3年
お約束もすんだところでー
これから…
ん?
澪は知ってるかな…
私がずっと澪のこと…
特別に…

やあ 律ちゃん

コイツは私のいとこ…

私が澪といっしょにいる所を
見て 紹介しろと
言ってきたヤツだ…

当然 断ったけど…
コイツはいやなヤツだから
それでスムはずがない

だから…私は…

私…受験勉強しないと
いけないんだけど…

大丈夫 大丈夫
オレがみてやるって
手とり足とり

んんーっ！

この新しいバイブはどう？

んっ

んっ

ごめんねーうるさいと近所に聞こえちゃうでしょ

今度はホテルに連れて行ってあげるからさ

コイツ…どんどんひどくなって…

こんな変態ヤローだったなんて…

ネロ

律ちゃんのオマ○コって 小っちゃくてきれいなピンクでかわいいね

でも もうこんなバイブもすんなり挿入ってさ すげー拡がって

んっ

これから どんどん
ビラビラに色素沈着
して グロマ○コに
なっていくんだよ

くふ

んふーっ

んっ

んーっ

たのしみだなぁー

もう人にーあっ
澪ちゃんにだって
見せられないように
してあげる

ん

んっ

いやだっ
こんなの…

まあ でも
律ちゃんの知らない
ところでー

たくさんの人に
見られちゃうん
だけど

あっ 察しがいいね

カメラはあちこちに匿(かく)してあるから

処女喪失のときのがネットで大人気だよ ヒヒ

んくぅーっ

大丈夫だよ まだ顔は消してあるからね クフッ

コイツ……

さて そろそろほぐれたかなぁ

んっ

ううっ

ビビビ ブブブ ボロ

フフ
ポッカリロあけたままだな

うぅーっ

んっ

奥からヌルヌルがとまらないぞ

オレのがもう挿入(はい)るだろ

んんっ

んんーーんっ

っくーーっ

何？
コンドーム？

もう いーだろ
気持ちいーからさ

んーーっ

んんっ

まぁ孕んだら
堕(お)ろせばぁ

ほら 挿入ってくよ

んふーっ

ぐぐっ

んく

挿

生だと気持ち
いーだろ
律ちゃんも

んっ
んっ

ぐぐっ

[redacted]

んっ

ふー

ふー

ふー

ぷるぷる

ぷるぷる

ぷる

ぎゅぎゅ

フフ
根元まで挿入った

[redacted]

ぐぐっ

ぷるぷる

ここまで挿入ってるのわかる？

んくっ

んっ

んっ

ほらぁ

んふ――っ

んっ――っ

ンフ
ンッ
ぐちゅっ
ンーーーっ
ん……
う……
ンフ
澪……私……
み…お……

ビリ

えっ

律ちゃん舌だして

ぺろ

んっ

ぺろ

ぺろ

んっ

ぺろ

あ…何……こんなの…

ちゅぱっ

ビビ

ビビ

律ちゃんは
かわいいなぁ

なっ

ビビ

ビビ

ぶるるっ

ぶるるっ

ふあっ

澪ちゃんってさ
えっちの時に どうせ
汚いとか言いそうじゃん
それでマグロとかで

きっとかわいげ
なさそうだし

あっ

澪は…
そう…たぶん…
…何も……

澪より…私の…
ほうが……

そうだよ
律ちゃんの方が
かわいいよ

ああっ

かわいくて もう
オレ いっちゃいそう

奥に出しちゃうよ

ぶるるっ

ぶるるっ

ドドド

そうやって
精液たらしてる
律ちゃんもサイコーだよ

かわいいよ

あ…

いや…
もう…

コイツに…
言われたからって
…わた…し…は…

律ちゃん
手をほどいて
あげるからさー

んっ

ほら あそこに
カメラがあるから
かわいくピース
してよ

ぼぉ

ぐい

あっ
えっ……

両手でやると
かわいいから

ほら ピース！

あ…

うん
こう？

トロ

久しぶり～梓ちゃん。
さっきのこ達は今のバンドの？
結局、学校の軽音部でやってるだね。オレ達さみしいな～。

『わ…私はもう…。』

ありがとムネ～ナ～まった接ぐたG!

や、帰らせて下さい。

別にい～んだけどさ、あのロングのこ、ベース？
あのこ、かわいいよね。今度誘ってみようかな～。
オレもベースだし～へへ。

『や…やめて下さい…零先輩は関係ない…』

お願いします…

精液(ザーメン)の味、覚えてる？
また、飲ませてあげるよ。ほら。
梓ちゃんもさ～オレ達とこーしてるのが好きでしょ？
『ちがいます…こんなこと…』
でも、最初に自分からチンポ舐めたいって言ったでしょ？
『だって…あれはっ…』
やっぱ梓ちゃん練習熱心だもんね
今でもココに内緒でこっそり練習してたり？
そんなわけっ
誰のだよっ
口で満足させられたらって、
誰かが言ったんだっけ？
まあ、そのあと全員でマワシテ、
膣内(ナカ)にもたっぷり出したよね～ごめんね～。
『うくっ…』
ドピュ
ドピュ
ドピュ

あれから、生理はちゃんときてる？

残念～妊娠しなかったか～。

まあ今回は大丈夫だよ。

オレ達以外にも呼んでるからさ～。

当分帰れないし。

ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ

梓……

ブルブル

ブルブル

ブルブル

あまりスペースでラクガキコーナー。

この本の編集中にそーいえば唯ちゃん
描いてないなーと…
唯ちゃんて描く前からなんかムズかしそう
かな、って思ってたら案の定ムズい→

「ただいま」
琴吹 紬は、使用人にそう声をかけながら自室へと向かっていた。

気が重い…
ちらりと時計を見る。すでに8時を過ぎている。今日は7時から用事があったのだけれど乗り気ではなかった。だからついつい、軽音部のみんなと離れるのが惜しくなって、長居してしまった。
…少し後悔はしているのだけれど、いっそ今日はこの後の事が、なくなってくれればいいな、とは思う…
…もちろん、そんな風にはならない事も知っている…だから気が重い…

カチャリ と自室の扉を開くと、そこには見知らぬ男たちがいた。それも10人！…びっくりして扉を開いたまま立ちつくしてしまう。
一目見て10人と数えられたわけではなかったが、わたしは知っていた。いつも10人だから…そうなんだろうと勝手に判断したのだ。でもここにいるはずない…だから驚き立ちつくしてしまう。

この様子を察したのか、一番端にいた男が紬に声をかける。
斉藤という初老のわたし付きの執事だ。初老といっても見た目はまだまだ若い。彼がいるという事は、わたしの部屋に男たちが11人いるという事か…まだ、数えたわけではないけれど。

「お嬢様、今日も遅いお帰りでございますね」
そう言った斉藤に、わたしは言葉を返さない。まだ状況をつかめていないから、言い訳をしても立場は悪くなるかもしれないし、いらない方向に話がいってしまうかもしれない。次の言葉を待った。
「外での生活の事を、とやかく言うつもりはございませんが、琴吹家の人間として、その役割を果たして頂かねば、私もフォローする事ができませんよ」

そう言って斉藤はわたしの味方のフリをする。
なぜフリかと言えば、斉藤は執事という事で表向きそのように振る舞ってはいるけれど、実情はわたしを支配しているからだ。だから味方ではない。実際、わたしのいない間の部屋に、男たちを待機させるような事をしている。

この人に軽音部の事はできる限り知られたくない。だから、ようやく動いてきた頭が反論や言い訳ではなく、話を進める事で誤魔化す事を選択した。
「どうして皆さんをこちらに？」
いや、正確にはこれも反論か。返ってくる答えは分かっている。ただそれに不満があるからつい質問にしてしまった。
「いつもの部屋ですと、まだ時間がかかりそうですから、こちらのほうで今日は授業していただく事に致しました」

やっぱり、予想通りの答え。この答えにわたしは落ち込む。

せめてこの部屋だけは…そう思った。軽音部のみんなと着た衣装や合宿の写真、クリスマスプレゼント…思い出のつまったモノがいっぱいある…この家で他とは違う場所…

一日を終えて、嫌なことを忘れられる…自分だけの場所が欲しかった。

明日から、この部屋でも男のニオイがするのだろう。

その思いが、わたしの行動を鈍らせている。

しびれを切らした斉藤が、わたしの服を脱がせにかかる。

「あの…シャワーを…」

すぐあとに、自身に起きることを想像して…それにもう、反抗できない事も分かっているので、つい、こんな言葉が出てしまった…

「今日はそのままでもいいと皆さんおっしゃってますから大丈夫ですよ」

「そうですか…」

そのままでいいという男たちのほうを見れば 彼らも下卑た笑いを浮かべながら、服を脱ぎ始めているところだった…

むき出しにされ、冷房によってよく冷えた空気にふれた乳首が、ツンと上を向いている

わたしはこれから、この10人の男に犯される。今日は11人かな。

この琴吹家は、その地位を維持するために色々な事をしているらしく、わたし程度の人間ではその輪郭を把握する事もできない。

ただその身に課せられた義務だけを果たしている。今日はその訓練の日だ。

こうやって犯され…調教され、身につけた技術で、接待をしなければいけない。それがわたしの琴吹家での役割。娘だとしても、女ならただの道具…

斉藤がわたしの胸をなでる。軽く触ったその指が、一日下着に覆われていて、敏感になった乳首の先を軽くひっかく。

「んくっ」

ガマンして声が漏れる。

この声に斉藤は満足そうにニヤリと笑っている。普通は違うんじゃないかなと思う。こんな敏感なカラダではないはず…わたしはたったこれだけのことで、目を潤ませ呼吸が荒くなる。

斉藤によって、そう作られてしまったからだ…

斉藤はわたしの幼い頃から、執事としてそばにいた。その頃から調教は始まっていて、全身をくまなく触られていたようだ。その成果が今のカラダなのだろう。

それはとても計画的だった。

その愛撫はとても早い時期からされていたけれど、それが性衝動へと結びつけられるのは、ずいぶん後になってから。そう、これは、とても長い準備期間だったようだ。

周りを見ると１０人の男たちの性器が見える。
自然とその一つに、手が伸びてしまった。

モゴゴ
おぐぅ
ん
ん
モゴ
んごぉ
チ○ポォ…オォ…
ちゅぱっ
ちゅぱっ

ボモ
ボモ
ボモ

何年か経って、性に目覚め、自慰を覚えた頃、斉藤のそれまでの行動が、性的なものであると理解した。でも、まだそれは自ら行う自慰での感覚と大差ないもののままだった。もちろん嫌悪感は抱いていたけれど…

ある日、斉藤がいつものように、わたしのカラダを愛撫していた。自慰と同じで、しばらく経てば頬は紅潮して呼吸が荒くなる。その時初めて、斉藤はズボンをおろして自らの性器を取り出して見せた。

初めて見るそのイビツな肉の塊に驚愕し、カラダを離そうとした、その瞬間、顔に注がれる白い液体。その衝撃が一気にわたしを絶頂へと導いてしまった…その光景を覚えている。そのニオイを覚えている。脳を犯された感じ…

わたしのカラダはそのとき、おかしくなってしまった。今まで準備された全身の感覚が活性化したように敏感になり、触れられればすぐに思い出していく…あの絶頂の快感を…

それからの斉藤は、いつもの愛撫の時、精液のニオイを徹底的にわたしに覚えさせた。確実に全身の感覚と、絶頂と精液とを結びつけていくために…

斉藤がまた乳首を軽くひっかいた。そのスイッチで、わたしは鼻の奥で精液のニオイを思い出していた。それを欲しいと思う。

周りを見ると10人の男たちの性器が見える。自然とその一つに手が伸びてしまった。

口いっぱいに頬ばった性器が、心をとろけさせた。

麻痺した感覚が恥ずかしさもなく、ずるると音を立ててしゃぶりつかせる。

じゅるるる ずちゅ

「んっんく ごくっ」

唾液とカウパー液の混ざった粘液を、おいしいと感じてすすり上げる。

その口に、別の男が強引に性器を突っ込んできた。

「まって やっ くぅん あくっ ちゅぷちゅるるっ ごくんっ んっ」

二本の肉棒が口を襲う感触が、全身へと伝わる。その味がさらに脳を犯す。

ガキュッ
んご
ごっ
ぐぐぐ
ぐぐぐん
ぐい
ぐい
ゴリ
ビュルビュルビュ
んくぅ
ぷるぷる
ぷるぷるぷる
とろ
とろ
はふ
あいっ
はふ
ぷろ

「んじゅっ じゅくんぐちゅるるっ ぢゅうぅ んくああ！」
最初の男が射精した精液が、のどの奥にからみつき、そのニオイが鼻から抜ける。
その瞬間、わたしのカラダがビクビクと痙攣する。
「ああぁぁぁ んぁあ い イっちゃった…まだいっぱい…あるのに」
顔中を精液まみれにして、紬はベッドに横たわっていた。
10人分フェラチオをしてる間に7回絶頂を迎えて、荒い呼吸のまま顔をベッドに埋める。
少し黄色みがかった精液がシーツに染み込んでいく…きっとクッションまで染みてしまうんだろうなと思った。明日からは、このニオイのするベッドで眠らないといけない。寝てる間にカラダにそのニオイがつかないか心配だった。唯ちゃんやみんなに気づかれちゃったらどうしよう…
どうしよう…だめなのに…
わたし…精液のニオイさせて学校に行くんだ…ああ…どきどきする…
「何を想像なされてるんです？」
斉藤がいつの間にか背後に、うつむけに横たわるすぐ上にいる。
「そんなに精液のニオイをつけて、学校へ行きたいのですね？」
「なっ!?」
何で考えてる事が分かるの？
「お嬢様をそのようにしたのは私でございますから。それではたっぷり、ニオイをつけて差し上げましょう」
そう言ったと同時に、そのまま背後からお尻の間へと肉棒を差し込む。
それには避妊具がついていない！
「あっまっ…て…コンドーム…が」
あわてて止めるが、斉藤はかまわず挿入する。
今まで、この訓練の時はいつも、避妊具が着用されていた。なので事前にピルを飲む事はない。ピルを飲むのは、たまにある接待の時だけだ。
妊娠するかもしれない…その恐怖が紬を支配していく。
「やっ、やめて…おねがい…いやぁあ」
斉藤はその言葉を無視して、激しく腰を打ち付けてくる。
その奥まで届く衝撃と熱が、ついさっきまで連続して絶頂を迎え、開ききった内臓があらがえるはずもなく、内側から来る快感の渦に精神が飲み込まれそうになる。
「いやっいやあーっ！ さいとうーやめてぇぇ」
股を開き、打ちすがう肉棒の動きに合わせて腰をグラインドさせてしまう。
もう快楽にどうにもならないと思う心と、妊娠の恐怖心が、紬の自尊心を下へ下へと追い込んでいく。

斉藤に、こういう風に攻められるのは二度目だ。処女をなくしたあの日がそうだった。

半年前のこと。いつもの愛撫も精液のニオイもない日だった。斉藤の部屋に縛られ、ただ犯されただけ。

斉藤以外にも人がいたけれど、お構いなしに犯す。その日はそのまま5時間ほど縛られたまま、気が向けば犯す、そんな感じだった。斉藤の部屋は使用人の出入りが激しいので、この家の大半の者が、わたしのその姿を見たはずだ…

それまで何年もの間、愛撫と精液の調教はされるものの、セックスそのものをされることはなかった。精神もカラダも汚れていくと感じるなか、唯一、処女だけは…そこだけはキレイなままなのだと思えた。

少し期待してた…いつか好きな人ができて、その人にあげれるんじゃないかって…

でも、琴吹家の当主、わたしの父が斉藤に命じる事で、そんな期待は簡単に終わってしまう。絶望感が、わたしなんて…そういう存在なんだと、脳に刻み込んでゆく。

その日から、琴吹家に所有され、斉藤が父の代理として、わたしを管理している。

琴吹家での役割を果たし、ほんの少し軽音部で安らぎを感じる。そんなもう残り少ない精神が、今また砕かれる。

「いや…おねがいです…ださないで…ああ…ださないでください…学校にいけなくなっちゃう…やぁ…みんなに…」

びちゅるるりゅ びゅくぅ!!

「ああ…熱っやああ…奥に出てる…んくぅ…」

大量の精液が子宮に流れ込んでくるのが分かる。子宮いっぱいに精液が張り付いてその熱を感じる。そこに入らなかった溢れた熱液が、膣内壁のひだひだの奥にまで満ちていく。

「あ…あ…妊娠しちゃう…はやく…ぬいて…」

「そうですね。早く抜いて次を挿入れませんとね」

斉藤の背後には、すでに別の男が控えている。

「だめっだめ…やだ…そんな…ひぐぅぅ あああ」

斉藤が出した精液をできるだけ溢さないように、次の男が性器を挿入してくる。

精液が溢れにくいように、今度は仰向けになって犯される。正常位というものらしい。愛し合っている二人が、お互いを認識しながら性交できる体位らしいけれど、今、目の前にいる人は知らない男だ。その男がまた自分の中に、精液をはき出そうとしている。

いやっ…
おねがいです…
ださないでぇ…

ああ…
ださないでください…
学校にいけなく
なっちゃう…

やぁ…
みんなに…

んくぅ

ああ

熱っやああ…
奥に出てる…

ビュクッ

ビュルルル

ガガ

ズボッ

ゴッ

ぱぁ

ぱぁ

ぱぁ

だめっ

だめ…やだ…

ガッ

ぢゅぽっ

ひぐぅっ

ぁぁぁ

ジュボッ

「んはぁあぁっ…ごめんなさい…おねがい…です…わたし…」
懇願した。許されるなら何でもする…そんな気持ちになっている
…
それと同時に今までに感じた事のない感覚が、おなかから広がっていく。痙攣のような絶頂に熱を帯びた、そんな波が脳を支配して、その元をとても愛おしく感じる。

目の前の知らない男が、やさしく微笑んでいると感じたので、キスをねだってしまった。
舌をしゃぶって、その唾液をおいしく飲み込んだ。
「いくの…いくぅ…あふ…ん…んグゥンン…イクゥっん!!」
びくん びくん!
今日8度目の絶頂を味わった時、また膣内へ射精を感じた。
「そんな…ああ…あ…ぁ…」

次いで、また知らない別の男が挿入してくる。やはり正常位のまま。
「んはぁあん」
つい、甘えた声が出てしまう。
嫌なのに…嫌なのに…妊娠しちゃうのに…なんで…

また中に出して欲しいだなんて…こんな事…思うなんて…わたし…
あと八人もいるのに…絶対妊娠する…
…絶対…
それはもう拒絶なのか、それとも熱望なのか、分からない感覚だった…

こんにちはこんばんは初めまして、サークルカニキエル巴天舞です。

いやーーーーと出しました！ちゃんと印刷した本！
毎度毎度だすだすと言いながらコピー誌ばかり作ってきましたが…やっと。
といっても半分は今までのコピー誌から…というものですが…。
一応貼れてなかったトーンを貼っての改訂版です。
コピー誌はいつもホントに少量しか作れないので、
いつかまとめとして出そうと思ってました。
今回初見だという方も多くいらっしゃると思います。
いかがでしたでしょうか？
お楽しみいただけたなら幸いです。
見た事あるわ～って方は、ホントにいつも
ありがとうございます。

次の印刷はいつになるのか…なんとも予定の立たない感じですが。印刷の方がやっぱりいいんじゃないっと、言う感じでしたら出来るだけ作っていきたいなとも思っています…と言うと出来ない事のが多いのでやばいかな…
ともあれ、今後ともよろしくお願いします。

近況です。

陵辱がちょっと書きたいなーというのと、
編集部が巴天舞は陵辱じゃないとだめじゃないか…というのが合わさって、たぶん陵辱書きそうです。
次の本の後ぐらいに。
ただ最近書いてなかったせいか、
私の陵辱脳はちょっとひどすぎて
書けないとか、なんか…書いたら
怖い目にあいそうなのとかしか
頭に浮かばないんですが…

世が世なので陵辱書いても売れないかもしれないですが…
なんとなく微妙じゃない？ってぐらいでも買って欲しいな…
陵辱も書いていたいですし。

あ、ただ次出る本はダラダラとした
もえでもない（もえがかけない）甘い目の話です。
だいたいバカっぽい感じの…
こちらもよろしくお願いします。

それは三年目の夏休み…
最初に来たのは三週間前…そのときは…うかれてた…
でも…ムギちゃんは…こんなことといいわけない…
それに…わたしも…教師として…もう…これ以上…

先生 今日も来てくれたんですね

ムギちゃん…

…やっぱりダメよ…もう…こんなコト…

ふふ大丈夫ですよだってこんなに気持ちいいんですもの

ムギちゃん…

それに今日も
たくさんの殿方が
おいでになられて
ますの

あっ

お待ちして
おりましたよ
さわ子さん

なっ…こんなに

先生も早く
やりましょう

私はもう
かわいがっていただ
いてましたから

もう
子宮いっぱいに

あっ待って
私は…

だめなの…

あっあっ…
ダメ…

あ…

あー

え…いや…

先生みてみて

大っきくてとってもおいしそうでしょ

だめ…これをくわえたら…

ほらこのチ●ポから食べて

また…忘れられなくなる…

すごーいそんな奥まででも…クスッ

なっ…いきなり射精て

おごっ
おっ

ゴボボ

ゴボボ

おいしいでしょ

先生のために
ずっと射精しないで
いてくれたんですよ

んぐっ

精液…ダメ…
私は……教……し…

ムギちゃんを…

あ…お…
チ●ポお…

ぷぴ

ぷぴ

先生 チ●ポなら
まだまだいっぱい

こっちも
おいしい

ぷ

ぷぴ

ぷぴ

あ……

ひあっ
あん
だめぇ…
だめー膣内はもういやぁー
おねがい…
ドビュ
ドビュ
ドビュ
ドビュ
いやあっあ…
あついの出てるー
いやっいやっ
ドビュ
ドビュ
ドビュ
ドビュ
ひきっ
またっちがうの…

あ――……
やぁ……

先生にも
赤ちゃん出来たら
みんな お祝い
してくれるかなぁ

赤ちゃん
出来ちゃう…

もう…精子
いやぁ…

わたしは…

あ…っく…
また…

もう…入らないから…

あ…

うご

に…妊娠してる…
…こんなの…
だめ…もう…
…赤ちゃんが…や…
…あ……
ドンッ
ドンッ
ドンッ

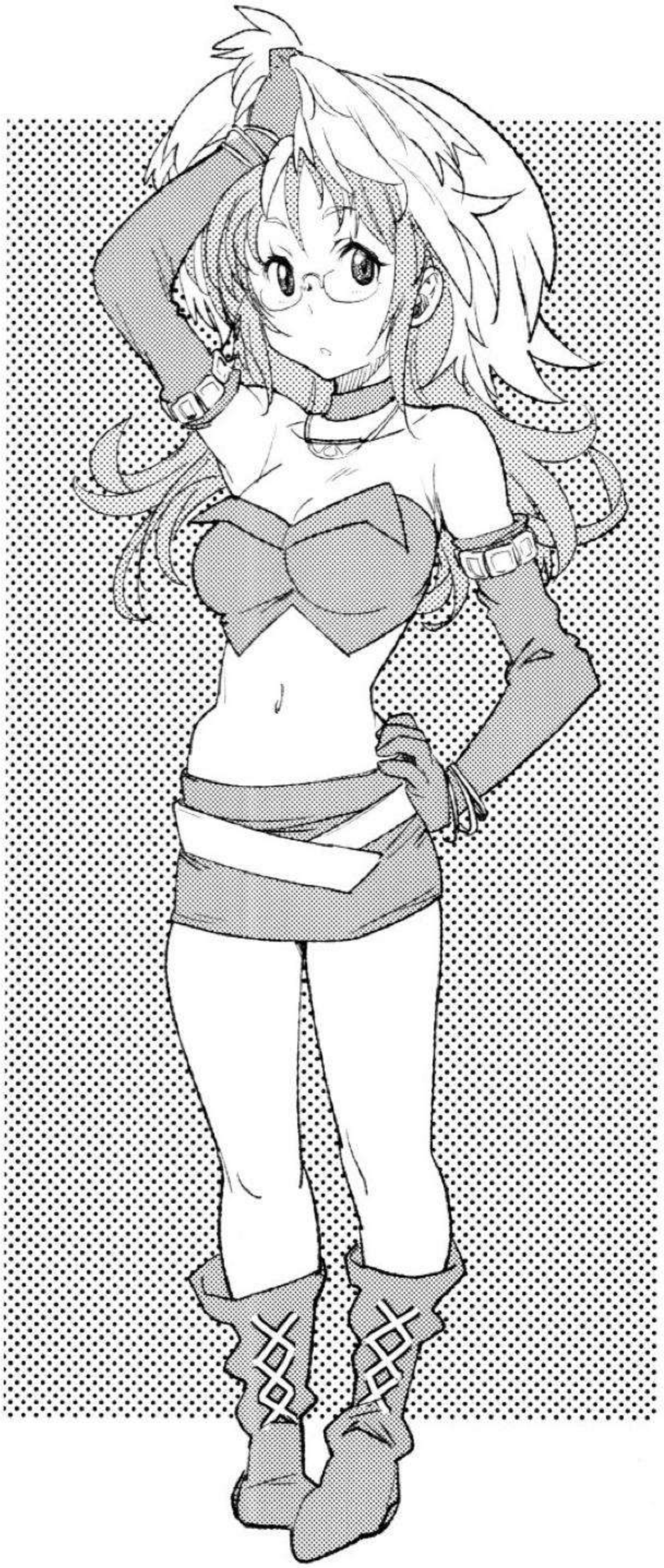
おくづけ
『　調律　』
2011/08/14　発行
サークル　『カニキエル』
発行者　　巴天舞

tomoetenbu@gmail.com
http://www.tomoetenbu.sakura.ne.jp/
http://tetete.blog.eonet.jp/tenbu/

印刷所　　PRINT DEPO

十八禁

18才未満の閲覧・購入・所持を禁止します。
成人向け
無断転載・複製を禁止します。



カニキエル
2011